

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	女子大学生の精神的自立と父娘関係：父親の再評価という視点から
Author(s)	野口, 康彦; 市川, 美樹
Citation	茨城大学人文社会科学部紀要. 人文コミュニケーション学論集, 3: 27-49
Issue Date	2018-09
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/13597">http://hdl.handle.net/10109/13597</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

# 女子大学生の精神的自立と父娘関係

— 父親の再評価という視点から —

野口 康彦

市川 美樹

## 要旨

本研究の目的は、女子大学生の父娘関係に焦点を当て、娘の精神的自立において、父親との関係性や父親の養育態度との関連について、質問紙による量的調査と個別のインタビューによる質的調査を通して検討するものである。また、質問紙及びインタビュー調査では母親との関係についても同様に分析を行い、父娘関係と母娘関係の比較を行うことで、父娘固有の関係性の分析を行った。調査の結果、親密な関係を保ったまま進展する母娘関係と比べると、思春期における距離のある関係を経て、青年期においては、父親の再評価と再接近がなされる傾向が調査協力者となった女子大学生にみられた。大学進学により、両親と離れて暮らすような経験をする中で、父親を社会人のモデルや生き方のモデルとして、さらに母親を一人の女性や母親のモデルとして受け入れるようになる。この様な過程を経て、父親の社会人としての働き方や生き方を参考にする視点を持つようになることが、女子大学生における精神的自立と父娘関係との関連で重要であると確認された。

## 1. 問題と目的

青年期後期にあたる大学生は、家族と接する時間が少なくなるにつれて親との距離を保つようになり、心理的・社会的に自立していく時期と言える。落合・佐藤（1996）は、青年期の親子関係について、「親が子どもを抱え込む親子関係／親が子と手を切る親子関係」、「親が外界にある危険から子どもを守ろうとする親子関係」、「子どもである青年が困った時に、親が助けたり、励まして子どもを支える親子関係」、「子どもが親から信頼・承認されている親子関係」、「親が子どもを頼りにする親子関係」の5段階を経て変化するという。

その一方で、藤原・伊藤（2010）は、大学卒業後も親と同居を続ける未婚の社会人女性が増加している現状を分析し、子どもが親に依存する青年期の長期化を示唆している。男性は女性よりも早い時期から家族よりも外の世界に目を向け、依存していた親から離れようとする傾向がある（伊藤，2005）とするならば、青年期後期の女性の親子関係と女性の精神的自立に着目することも重要ではないだろうか。

青年期女性の親子関係には母娘関係と父娘関係がある。水本（2016）は、青年期後期の女性が母親に抱く親密性を測る尺度を作成し、女子大学生を対象とした質問紙調査を行い、親密性には「母親への心づかい」、「母親への絶対的安心感」、「母親への価値観へのとらわれ」の3側面があること、これらの親密性は「母親との信頼関係」と「母親からの心理的分離」という精神的自立の2側面に異なる影響を与えることを明らかにした。藤原・伊藤（2010）は、青年期の女性にとって、母親への信頼が高く、かつ母親に対する依存が低いことが心理的健康と結びついており、中でも母親への信頼は娘の自己受容及び積極的な他者関係と強く関連していると指摘した。

一方で、父娘関係を対象とした報告もみられるようになった。春日（2000）は父娘関係に関する先行研究を展望し、男性よりも女性は父親の愛情を敏感に感じ、父親から愛されているという確信は自身の存在を支えるものとして重要な役割を果たしており、娘の人格形成に対して、父親は自我同一性やSelf-Esteemなどさまざまな面で影響すると述べている。娘の健康な心理発達には、母親だけでなく父親との良好な関係による影響も受けている。また、小野島（2016）は、青年期の親子間コミュニケーションについて、それまでの母親主体の親子間コミュニケーションから、父親と母親の協働によるものへと変化すると述べている。青年期は親から自立する時期であるが、子どもの精神的健康が維持されるためには、母親だけでなく父親のかかわりも必要となる。さらに、鹿内（2013）は、大学生を対象とし、希望進路、希望するに至った過程、仕事に対する構えに影響を及ぼした要因、親との関係を尋ねる面接調査を行い、父親は女子大学生の職業意識に大きな影響を与えていると指摘している。家庭生活において父親は社会人としての顔を見せる場面が比較的多く、将来の進路を考えるうえで、大学生は父親を社会人としてのモデルとしてとらえることもある。女子大学生の精神的自立には、母親との親密な関係が大きく関連していると考えられるが、その一方で、母親とは異なる父親との関係の構築も影響している。

そこで、本研究では、女子大学生の父娘関係に焦点を当て、娘の精神的自立において、父親との関係性や父親の養育態度との関連について、質問紙による量的調査と個別のインタビューによる質的調査を通して検討する。これらの調査を通して、青年期を生きる女子大学生の父親像、そして娘にとって父親はどのような存在であるのかという、娘の視点から見た父親の姿を明らかにしたい。なお、質問紙及びインタビュー調査では母親との関係についても同様に分析を行う。量的及び質的調査から得られた結果をもとに、父娘関係と母娘関係の比較を行うことで、青年期における父娘固有の関係性について検討する。

## 2. 研究Ⅰ：質問紙調査

### (1) 調査対象者と手続き

2017年4月から2017年11月にかけて、関東圏の国立大学の学生2～4年生（19歳～24歳、平均年齢19.9歳）を対象に無記名式の質問紙調査を行った。その結果、126名の質問紙を回収し、有効回答数は123名であった（男性40名、女性83名）。

### (2) 質問紙の構成

#### ①フェイスシート

性別、年齢、所属学部、学年、居住形態、きょうだいの有無、親の状況、家族構成の8項目を尋ねた。

#### ②親子関係尺度（久和・梁，2006）

久和・梁（2006）は、落合・佐藤（1996）が使用した親子関係について尋ねる質問項目を参照しながら母親との関係について16の質問項目を設定した。回答はそれぞれの項目に対して「1. よくあてはまる」から「5. 全然あてはまらない」の5件法で評定してもらった。この尺度は、「子が親から信頼・承認されている親子関係」、「親が子と手を切る親子関係」、「親が子を頼りにする親子関係」、「子が困ったときには親が支援する親子関係」の4つの下位尺度から構成されている。各下位尺度の内容は以下のとおりである。

##### 1) 子が親から信頼・承認されている親子関係

子どもが親から信頼され、一人前の人間として認められているという実感を子どもがどの程度もっているかを測るものである。質問は、「母親（父親）は、干渉はしないが、いつも私のことを気にかけている」、「母親（父親）とは、お互いに個人として尊敬しあう仲である」などの7項目である。

##### 2) 親が子と手を切る親子関係

親が子どもと手を切り、離れようとしていると子どもがどの程度感じているかを測るものである。質問は、「母親（父親）は、私が何をしてもお構いなしである」、「母親（父親）は、私にあまり関心をもっていない」の2項目である。

##### 3) 親が子を頼りにする親子関係

親が子を頼りにし、子が親を支えることもあるという意識をどの程度子どもが持っているかを測るものである。質問は、「母親（父親）は、迷ったときには、私の考えを参考にしようとする」、「母親（父親）は、私に相談をもちかけてくれることがある」などの4項目である。

##### 4) 子が困ったときには親が支援する親子関係

子どもが困ったときに親が助けてくれたり励ましてくれたりするかを子どもがどの程度感じているかを測るものである。質問は、「私が困ったときに、母親（父親）は心の支えになってくれる」、「母親（父親）は、私が解決できないことをすぐ解決してくれる」などの3項目

である。

### ③KiSS-18 (菊池, 1988)

社会的スキルと親子関係との関連を検討するため、菊池 (1988) のKiSS-18 (Kikuchi's Social Skill Scale : 18 Items) を使用した。なお、楠奥 (2009) はKiSS-18の因子分析を行い、「積極的な会話スキル」、「自己統制スキル」、「ストレスマネジメントスキル」、「マネジメントスキル」と命名している。本研究においては、楠奥の因子分析による結果を参照した。回答はそれぞれの項目に対して「5.いつもそうだ」～「1.いつもそうでない」の5件法で評定してもらった。「積極的な会話スキル」には「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」、「他人が話しているところに、気軽に参加できますか」などの5項目、「自己統制スキル」には「仕事のうえで、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか」、「まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていけますか」などの6項目が含まれている。同様に、「ストレスマネジメントスキル」は「気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか」、「こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか」などの5項目、「マネジメントスキル」は「他人を助けることを、上手にやれますか」、「他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか」の2項目からなっている。

## (3) 結果

使用した尺度においてCronbachの $\alpha$ 係数を算出した結果、すべて0.8以上の値が得られたため、十分な信頼性が確認された。

### ①親子関係と社会的スキルの相関

女子大学生の回答について、親子関係尺度の下位尺度とKiSS-18の4因子との間で相関係数を算出し、その結果を表1、2に示した。親子関係尺度のうち父娘関係とKiSS-18との相関では、「父親が子と手を切る親子関係」と「ストレスマネジメントスキル」との間に5%水準で有意な弱い負の相関 ( $r=-.245, p<.05$ )、「マネジメントスキル」との間に1%水準で有意な弱い負の相関 ( $r=-.293, p<.01$ ) がみられた。また、「子が困ったときには父親が支援する親子関係」と「積極的な会話スキル」との間に5%水準で有意な弱い相関 ( $r=.259, p<.05$ ) がみられた。

母娘関係とKiSS-18との相関では、「子が母親から信頼・承認されている親子関係」と「積極的な会話スキル」との間に5%水準で有意な弱い相関 ( $r=.229, p<.05$ )、「自己統制スキル」との間に5%水準で有意な弱い相関 ( $r=.247, p<.05$ )、「ストレスマネジメントスキル」との間に5%水準で有意な弱い相関 ( $r=.218, p<.05$ ) がみられた。また、「母親が子を頼りにする親子関係」と「自己統制スキル」との間に1%水準で有意な弱い相関 ( $r=.391, p<.01$ )、「ストレスマネジメントスキル」との間に1%水準で有意な弱い相関 ( $r=.355, p<.01$ )、「マネジメントスキル」との間に1%水準で弱い相関 ( $r=.343, p<.01$ ) がみられた。

表1 女子大学生における父娘関係と社会的スキルの相関係数

	子が父親から信頼・承認されている	父親が子と手を切る	父親が子を頼りにする	子が困ったときには父親が支援する
積極的な会話スキル	.095	-.125	.146	.259*
自己統制スキル	.078	-.198	.161	.143
ストレスマネジメントスキル	.012	-.245*	.148	.153
マネジメントスキル	-.018	-.293**	.057	.020

注：\*\*p&lt;0.01 \*p&lt;0.05

表2 女子大学生における母娘関係と社会的スキルの相関係数

	子が母親から信頼・承認されている	母親が子と手を切る	母親が子を頼りにする	子が困ったときには母親が支援する
積極的な会話スキル	.229*	-.095	.209	.149
自己統制スキル	.247*	-.045	.391**	.117
ストレスマネジメントスキル	.218*	-.046	.355**	.162
マネジメントスキル	.173	-.049	.343**	.069

注：\*\*p&lt;0.01 \*p&lt;0.05

## ②居住形態による比較

女子大学生の回答について、親と同居している者を同居群、一人暮らしまたは寮に住んでいる者を非同居群とし、各群の間で親子関係尺度の下位尺度とKiSS-18の4因子についてt検定を行い、その結果を表3に示した。t検定の結果、「子が母親から信頼・承認されている親子関係」にのみ同居群と非同居群の平均値に有意な差が認められた。

表3 女子大学生の居住形態による比較

	同居群 N=31 平均値 (SD)	非同居群 N=52 平均値 (SD)	t 値
子が父親から信頼・承認されている	22.74 (7.7)	25.7 (10.3)	1.371 n.s.
子が母親から信頼・承認されている	22.19 (6.41)	27.07 (5.1)	3.828*
父親が子と手を切る	3.8 (1.79)	3.77 (2.15)	-.081 n.s.
母親が子と手を切る	3.58 (1.88)	3.58 (1.73)	-.009 n.s.
父親が子を頼りにする	9.16 (3.88)	9.21 (5.13)	.047 n.s.
母親が子を頼りにする	13.16 (4.47)	14.42 (3.74)	1.381 n.s.
子が困ったときには父親が支援する	9.13 (3.83)	9.73 (4.55)	.618 n.s.
子が困ったときには母親が支援する	10.81 (2.15)	11.77 (2.26)	1.909 n.s.
積極的な会話スキル	14.42 (4.43)	14.83 (4.23)	.417 n.s.
自己統制スキル	19.77 (4.65)	19.71 (4.12)	-.064 n.s.
ストレスマネジメントスキル	14.42 (3.9)	14.19 (3.52)	1.688 n.s.
マネジメントスキル	5.77 (1.8)	6.38 (1.46)	-.273 n.s.

注：\*p&lt;0.05

## ③性別による比較

親子関係尺度の下位尺度とKiSS-18の4因子において性別による平均差があるかどうかを検討するため、t検定を行った。その結果を表4に示した。t検定の結果、「母親が子を頼りにする親子関係」、「自己統制スキル」、「マネジメントスキル」において男性と女性の平均値に有意な差が認められた。

表4 性別による比較

	男性 N=40 平均値 (SD)	女性 N=83 平均値 (SD)	t 値
子が父親から信頼・承認されている	25.03 (7.68)	24.58 (9.48)	1.76 n.s.
子が母親から信頼・承認されている	23.88 (6.4)	25.25 (6.07)	-1.159 n.s.
父親が子と手を切る	4.32 (2.22)	3.82 (2.07)	1.240 n.s.
母親が子と手を切る	3.78 (1.87)	3.67 (1.84)	.316 n.s.
父親が子を頼りにする	9.73 (4.94)	9.19 (4.68)	.580 n.s.
母親が子を頼りにする	11.68 (4.36)	13.95 (4.85)	-2.850*
子が困ったときには父親が支援する	9.18 (3.95)	9.51 (4.28)	-.412 n.s.
子が困ったときには母親が支援する	10.48 (3.2)	11.41 (2.26)	-1.661 n.s.
積極的な会話スキル	15.25 (4.16)	14.67 (4.28)	.705 n.s.
自己統制スキル	21.7 (3.69)	19.73 (4.3)	2.485*
ストレスマネジメントスキル	15.0 (3.68)	14.28 (3.65)	1.027 n.s.
マネジメントスキル	6.83 (1.53)	6.16 (1.61)	2.188*

注：\* $p < 0.05$

## (4) 考察

## ①親子関係と社会的スキルの相関

## 1) 父娘関係と社会的スキルの相関

父娘関係においては、父親が娘と手を切る関係であるほど娘の「ストレスマネジメントスキル」や「マネジメントスキル」も低くなるという結果が示唆された。「親が子と手を切る親子関係」という下位尺度は、「母親（父親）は、私が何をしてもお構いなしである」、「母親（父親）は、私にあまり関心をもっていない」の2つの質問項目で構成されており、父親の自分への関心の低さを感じていると捉えることもできる。春日（2000）は、娘が自分は父親から精神的に独立した存在であり、父親から自律性も尊重されていると感じているが、一方で父親からの情緒的な支持を感じている、つまり父親は自分を応援し、味方をしてくれていると思っているほど、娘のSelf-Esteemは高くなると述べている。このことから、父親から関心を向けられず、情緒的に支持されているという意識がないと、それは自己への肯定的な態度を持たないことにつながり、「ストレスマネジメントスキル」や「マネジメントスキル」への評価が低くなったのではないだろうか。

また、娘が困ったときには父親が支援する関係であるほど、娘の「積極的な会話スキル」も高くなることが示唆された。困ったときに父親が支援してくれるためには、普段から良好な関係を築いていることが必要である。「積極的な会話スキル」が高ければ、普段から父親と会話し、助けを求めることができるため、娘が困った時には父親が支援する親子関係との相関がみられたのではないだろうか。信頼関係をもとに、娘が困ったときには親が支援する親子関係であるほど、娘の積極的な会話スキルが高くなるという結果は、「父親と娘が信頼している関係を築いているほど、コミュニケーションスキルをはじめとする社会的スキルが高くなる」という仮説を支持するものであったといえる。

さらに、「子が困ったときには父親が支援する親子関係」と「積極的な会話スキル」との間には有意な相関がみられたが、「子が困ったときには母親が支援する親子関係」と「積極的な会話スキル」との間には有意な相関がみられなかった。これらの結果から、父親が支援してくれるという意識は、娘が積極的に会話する力が高いほど強いが、母親が支援してくれるという意識は、娘の会話するスキルの高さに関係なく保たれると考えられる。父娘は距離のある関係であることが多いので、娘が積極的に支援を求めることができると父親はそれに気づくが、娘が支援を求めることができないと、父親はその必要性に気づかないのではないだろうか。一方で母娘は距離が近いので、母親は娘が困っていることに気づきやすい。娘にとって母親は「積極的な会話スキル」の高さにかかわらずいつも支援してくれる存在と言えるだろう。

## 2) 母娘関係と社会的スキルの相関

母娘関係においては、娘が母親から信頼・承認されているほど、娘の「積極的な会話スキル」や「自己統制スキル」、「ストレスマネジメントスキル」も高くなるということが明らかになった。また、母親が娘を頼りにする関係であるほど、娘の「自己統制スキル」や「ストレスマネジメントスキル」、「マネジメントスキル」も高いことが示唆された。娘の自立によって、母親からの信頼や承認を得たり、頼りにされたりすると考えることもできる。親以外の他者とのかかわりを通して、娘はさまざまな社会的スキルを高めているのではないだろうか。野間ら（2013）は、大学生を対象とした質問紙調査を行い、母親と親密な関係を築いている娘は、母親と希薄な関係を築いている娘に比べて自尊感情が高く抑うつが低いことを示唆している。母親と娘が親密な関係を築いていることは、母親が娘を信頼したり頼りにしたりすることと関連しており、それが娘の自尊感情の高さや抑うつの低さ、あるいは対人場面での自信につながっているのではないだろうか。

### ②居住形態による比較

女子大学生の父親との関係において、親と同居しているか否かによる差はみられなかった。同居・非同居にかかわらず、娘と父親とのかかわりは少ないため、父親と空間的に離れて暮らすことによって関係性に変化が生じなかったのではないかと考える。

母親と娘との関係では、親と同居していない人は、同居している人よりも母親から信頼・



承認されていると感じていることが示唆された。母親との関係のみにおいて有意差がみられた背景には、母と娘は同性のため、一般的に父親と娘の関係よりも親密であることが挙げられるのではないだろうか。落合・佐藤（1996）によれば、「子が親から信頼・承認されている親子関係」は大学生になるとよくみられるようになるという。今回の質問紙調査の対象は、主に大学2年生であった。ある程度の期間一人暮らし経験していることで、母親は娘を自立した一人の女性としてみるようになり、信頼や承認をしていることを示すのだと考える。また、娘の視点に立つと、普段は母親と一緒に暮らしていないため直接ぶつかることはないが、実家に帰省したときや連絡をとり合うときに母親からの信頼や承認を感じ、母親の肯定的なイメージが強化されるのではないだろうか。

### ③性別による比較

女性も男性よりも、「母親が子を頼りにする親子関係」を築いているということが分かった。野間ら（2013）が行った母親との関係における男女差の分析によれば、母親に対する信頼や愛情といった気持ちは女性のほうが男性に比べて高く、母親に依存している度合いも女性のほうが高いという。また、親からの精神的自立の男女差について水本（2009）は、男性では親と距離を置くようにして親から分離し独立性を確立した後に、その距離を置いたままで親への高次の親和性を獲得するのに対し、女性においては親との近い距離を保ちながら自立するとしている。つまり、その距離を広げることなく、関係性の中での自己の確立と高次の親和性への移行が並行して進行するというのである。これらのことから、精神的な自立を経ていく過程において女性は母親との親密で信頼感のある関係を保ちつつ、対等な関係性を築いていくのではないかと考える。

「自己統制スキル」と「マネジメントスキル」は、女性よりも男性のほうが有意に高いということが明らかになった。渡邊（1998）は、自己評価や自信などは、小学校高学年頃から男子より女子のほうが低くなり、性差が顕在化し、その後さらにその性差が大きくなっていくと述べている。このことから、実際のスキルの高さの差というよりも、自己の能力に対する評価の仕方の男女差によって、このような結果となった可能性も考えられる。

## 3. 研究II：インタビュー調査

### (1) 方法

#### ①調査対象者と手続き

2017年4月に実施した質問紙調査において、質問紙の末尾に連絡先記入欄を設け、女子大学生の中でインタビュー調査に協力してもよいという方に連絡先を記入してもらった。後日、連絡先の記入があり、インタビュー調査に参加可能であった方の中から8名に調査への協力を依頼した。調査協力者には倫理的配慮として、インタビューによって得られたデータは本

研究以外には使用しないこと、個人を特定できないように加工すること等、プライバシーを厳守することを説明し、承諾を得た。各調査協力者のプロフィールについては以下の表5に示した。なお、調査協力者の年齢は質問紙調査当時のものである。

2017年10月に、調査協力者8名に1回ずつ半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。調査協力者は全員女性であった。時間は1時間程度で、実施場所は茨城大学図書館内のグループ学習室を使用した。インタビューは調査協力者の同意を得た上でICレコーダーに録音し、終了後に逐語化した。逐語記録をデータとして、父娘関係と母娘関係についてはグラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析を行った。なお、グラウンデッド・セオリー・アプローチは、データに密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法である。本調査では、女子大学生の語りに密着して父娘関係について分析することを目的としているため、この分析方法を採用した。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、その学派の違いからいくつかの方法があるが、本研究では、Strauss & Corbin(1990)の方法に準ずる手続きを用いることとした。手順としては、オープン・コーディング、軸足コーディング、選択コーディングの3段階でデータの分析を行い、コーディングからカテゴリー化のプロセスを踏まえたうえで仮設の生成を行った。

表5 調査協力者のプロフィール

	年齢	居住形態	家族構成
Aさん	19	一人暮らし	父、母、姉、姉、祖母
Bさん	19	一人暮らし	父、母、父方の祖父母、母方の祖母
Cさん	19	一人暮らし	父、母、祖父
Dさん	19	一人暮らし	父、母、妹、弟、祖父、祖母
Eさん	19	一人暮らし	父、母、弟、弟、妹
Fさん	19	一人暮らし	父、母、兄
Gさん	19	一人暮らし	父、母、妹
Hさん	19	一人暮らし	父、母

## ②インタビュー質問項目

女子大学生の父娘関係について検討するため、娘から父親はどのように見えており、青年期の女性の精神的自立と親子関係、特に父親との関係にはどのような関連があるのかについて聞き取りを行い、母娘関係との比較から考察することを目的とした。そのため、インタビューではあらかじめ以下に挙げた5つの質問項目を準備し、対象者の状況やその語りに応じて確認や問いかけをした。なお、3)の質問項目の設定時には、大島(2016)を参考にした。

- 1) 父親、母親はどんな人か
- 2) 現在の親子関係はどのようなか
- 3) 父親、母親からしてもらって嬉しかったこと

4) 理想の父親、母親について

5) 自分の社会的スキルについてどのように感じているか

## (2) 父娘関係についての結果と考察

### ① カテゴリー一覧

父娘関係については、調査協力者8名の計63のサブ・カテゴリーをもとにカテゴリー化を行い、8つのカテゴリーを抽出した。全体のカテゴリー一覧を表6に示した。

表6 父親についてのカテゴリー一覧

カテゴリー	サブ・カテゴリー
距離のある関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成長とともに薄くなる関係</li> <li>・直接ぶつかることのない関係</li> <li>・薄くなった関係への危機感</li> <li>・悪くならなかったイメージや関係性</li> <li>・まともだから嫌いではない</li> <li>・距離があった時期</li> <li>・コミュニケーションをとりたい</li> <li>・苦手だった時期</li> <li>・嫌いにはならなかった</li> <li>・もっと関わってほしい</li> <li>・少し距離のある関係</li> <li>・たまに連絡が来る</li> </ul>
離れて暮らすことによる父親への再評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・反抗期とその反動での関係の変化</li> <li>・実家にいた頃の関係の薄さ</li> <li>・大学生になり近くなった関係</li> <li>・離れて良好になった関係</li> <li>・離れたことによる心境の変化</li> <li>・昔よりは良好な関係</li> <li>・対等な関係</li> <li>・コミュニケーションのある関係</li> <li>・コミュニケーションの楽しさ</li> </ul>
父親による家族の配慮への気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びに連れて行ってくれる</li> <li>・優しい</li> <li>・怒られる</li> <li>・送り迎えをしてくれた</li> <li>・家事を手伝ってくれた</li> <li>・家庭への近さ</li> <li>・料理を作ってくれた</li> <li>・聞き役の上手さ</li> <li>・面倒見の良さ</li> <li>・母娘間への介入</li> </ul>
いざというときの頼れる姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いざというときに関わる</li> <li>・将来について相談するようになった</li> <li>・頼りになる面</li> <li>・いざというときに頼りになる</li> <li>・社会的で仕事ができる</li> <li>・仕事での責任感</li> <li>・精神面の強さ</li> </ul>

陰から見てくれている	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関心を持ってくれたことへの嬉しさ</li> <li>・しっかり見てくれている</li> <li>・娘を喜ばせてくれる</li> <li>・ふとしたときに見せる子どもへの愛情</li> <li>・間接的に伝わる自分への心配</li> <li>・娘への支持的な態度</li> <li>・気持ちの共有</li> <li>・干渉しない</li> </ul>
父親との情緒的な結びつきの想起	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊んでくれた</li> <li>・小さい頃のかかわり</li> <li>・小さい頃の思い出</li> <li>・大好きで一緒に遊んでいた幼少期</li> </ul>
家庭では見せない一面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職場では普通に話している</li> <li>・家族には見せない顔</li> <li>・自由なふるまう存在</li> <li>・家族以外へのフランクさ</li> <li>・見栄がある</li> <li>・週末は活動的</li> </ul>
威厳のある父親像	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無表情で物静か</li> <li>・自分を表に出さない</li> <li>・自分の考えを押し付ける</li> <li>・親としての威厳</li> <li>・きっちりしている</li> <li>・せっかち、寡黙さ、頑固さ</li> </ul>

## ②各カテゴリーについての考察

各カテゴリーについて考察を行った。斜体の文字は、調査協力者の発言である。

### 1) 距離のある関係

父親とはときどき連絡をとる程度で、話しをするのは大事な相談や経済的な支援など、父親とは距離のある関係だという語りが多くみられた。また、近況の報告や相談は母親を介して行うという発言もあった。必要な時でしかかかわらないような関係のようではあるが、娘が父親を嫌っているわけではなく、単身赴任などによる事情があつて、父親と接する機会が少なくなっている調査協力者もいた。父親のことを嫌いにはならなかったというGさんは、「家族のために働いてくれたりしてるので、なんかそういうことを思いたくなかったというか、なんか頑張ってくれてるのに、そういう態度とるのはなんか失礼、みたいな、そんな態度とれないなっていう気持ちがあつたのかなって思いますね。」と語った。また、Cさんは、現在も一人暮らしで父親との交流が減っているが、就職後にはさらにかかわる機会が減ると予想しており、「今が一番かかわるべきときなのかなっていうのはある」と述べた。父親との距離については、もっとかかわってほしいという要望やコミュニケーションをとりたいという気持ち、距離のある関係に危機感を抱いている様子もうかがえた。大学生になって父親との関係を見つめなおし、娘が父親と再接近するという面があるのではないか。

## 2) 離れて暮らすことによる父親への再評価

調査協力者8名は全員一人暮らしをしており、父親との間に空間的な距離ができたことで関係や心境にプラスの変化が生じたという発言が多くみられた。下茂・桂田(2015)の女子大学生を対象とした質問紙調査では、娘の父親評価は小学生時代、現在、中学生時代の順に良いということが示されており、今回のインタビュー調査からも同様の傾向がみられた。小さい頃は父親と仲が良く好きだったが、中学生や高校生の頃は反抗期であまり話さなかったという調査協力者も複数おり、実家に住んでいた頃は現在よりも父親との間に距離があったというエピソードが多かった。高校生のときに喧嘩をして父親と口をきかない時期があったというEさんは、「きっかけは忘れちゃったんですけど、話すように元に戻って、私はすごい父と話せなくなったこと、口きけなくなったことが多分途中からすごい寂しくなっていて、だから、戻ったときが嬉しくて、だから前よりも自分から話すようになった」と語っていた。また、中学生時代に父親とほとんど話さなかったというFさんは、「今は感謝もしてますし、反抗期の度合いもけっこう自分でもひどかったなと思うので、もう高校生からはもうそれはなかったんですけど、それを代償じゃないですけど、その分も今ちゃんと優しく感謝の気持ちが出るように接しなきゃだめだなと思って、昔の分取り返せるぐらい仲良くしようと思ってすごいそういう気持ちで接してます」と語っていた。このように、反抗期で父親とあまり話さなかった時期の反動もあり、たまに会ったときには自分から積極的にコミュニケーションをとりたいと感じていると考えた。

父親と離れて暮らすことによる変化には、もう一つの側面がある。大学に入ってから、今まで相談をしてこなかった父親と将来について相談するようになったというエピソードやアルバイトを始めて働くことの大変さを実感し、毎日仕事をしてきている父親への感謝の気持ちが生まれたというエピソードも挙げられた。大学生になり、将来について父親の話を聞くことや相談することが増えたり、社会人としての父親への尊敬が生まれやすくなることによって、娘が持つ父親イメージが変化し、社会人のモデルとしての父親の存在の再評価が行われている。

## 3) 父親による家族の配慮への気づき

父親が子どもや母親のためにしてくれた行動について、送り迎えをしてくれたというエピソードや遠くに遊びに連れて行ってくれたという語りがよくみられた。大島(2016)は、青年から見た父親の好ましい姿について、社会人としての責任を果たす中で、できる限り家庭での父親役割を果たしてくれたことを子は評価していると述べている。家族の一員であるとともに社会人でもある父親が、仕事だけでなく家族のためにも行動してくれることは、父親への高い評価につながるだろう。母親が忙しいときには家事を手伝ってくれるというような、母親のサポートをすることもまた、夫婦の信頼関係の構築や子どもからの良いイメージに影響すると考える。

母親と喧嘩したときに、父親が話を聞いてアドバイスをくれたというエピソードも得られ

た。Bさんの父親は家族間に介入してくることがめったにないそうだが、母親と喧嘩をして口をきかなくなったときに話を聞いてくれたり、客観的な立場からアドバイスをくれたりしたことで助かったと語った。母親と娘は非常に親密な関係であるが故に、直接ぶつかることも多い。そのようなときに第三者として介入し、冷静な意見を与えて家族関係を安定させることは、父親の役割の一つであると考えられる。

#### 4) いざというときの頼れる姿

いざというときに、父親を頼りにする場面が多く、協力者から語られた。青年から見た父親・母親の好ましい姿について大島（2016）は、父親からしてもらって嬉しかったことの要素の一つとして、ここぞというときに要所を押さえてくれたということ挙げている。既述したように、大学生の娘と父親は距離のある関係であり、普段あまり深くかかわることはないが、進路の話し合いや将来の相談をするときなど、大事なときは話をしたり連絡をとったりしている。日常的な相談事は母親とするが、就職や進路などといった大事な選択相談する際は、社会人の先輩としての父親を頼りにする場面が多いのではないだろうか。いざというときに娘が父親を頼りにする行動をとる背景には、頼れる存在としての父親像がある。社会的で仕事ができる、仕事を頑張っていて精神面が強い、真剣に意見をくれるなどの父親像がインタビューにおいても見受けられた。社会人としての理想的な姿があることによって、大事なときに頼れる対象としての父親の存在感が大きくなるのではないだろうか。

#### 5) 陰から見てくれている

父親は娘のすることに対してあまり干渉せず意思を尊重してくれるという語りや、父親は常に娘に対する関心や心配を示してくれるわけではないが、ふとしたときにそれらを表現してくれたというエピソードがしばしばみられた。前者の語りに関しては、Gさんの「大学の進路で悩んだときに、まずは私がやりたいことを優先させてくれて、相談には乗ってくれるんですけど、最終的には私のやりたいこと、考えるほうに進めばいいよって言うてくれましたね。」というものがあつた。後者に関しては、父親がマラソン大会に応援に来てくれたときに「沿道に立っててくれて、応援してくれたのが、あんまり普段しゃべらないのに応援してるって思っ、嬉しかったです。」というBさんのエピソードがあつた。

春日（2000）は、娘にとって父親がマイナスになるケースとして、あまりにも父親の存在感がない場合や娘に対して過干渉であつたり、あるいは娘の意見を取り入れない頑固な父親である場合があると述べている。語られたエピソードでは、親は自分の意見を押し付けることはせず、何かがあつたときに娘への関心や心配を示すことによって、その存在感を増しており、娘の持つ好ましい父親像につながっているのではないかと推察される。陰からそつと見守りながら応援してくれている父親の存在が、肯定的な父親像としてイメージされるのであろう。また、父親が娘に対して心配していると直接言うことはないが、母親からそれを聞き、父親から心配されていることが伝わるという語りもあつた。父親の抱く娘への心配や関心は、母親を介して間接的に伝わることもある。娘は普段、父親から関心を持たれていることを意識す

ることは少ないからこそ、そのような父親の気持ちを受け取ることは娘にとって重みがあることであり、ふとした父親の愛情にふれると、嬉しさを感じるのではないだろうか。中丸ら(2010)は、父親からの愛情供給を受けることは単に親から愛され受け入れられているだけでなく、社会から、そして異性・男性から受け入れられていることにつながり、娘の自己受容・自尊感情を高めていると述べている。父親の持つこれらの特性も、娘が父親からの愛情を受け取る重みに関連している。そのように考えると、娘の精神的健康のためには、陰から見守る態度のような、娘に対する父親のさりげない配慮の仕方が重要であるといえよう。

#### 6) 父親との情緒的な結びつきの想起

複数の調査協力者から、小さい頃に父親が遊んでくれたという思い出に関する語りがみられた。Cさんは、幼少期に父親が毎日絵本を読んでもらったと話した。父親と遊んでいた記憶があまりないという調査協力者もいたが、Cさんをはじめとして詳細まで覚えているという人もいた。仕事によって父親が家庭を不在にする時間が長い場合、父親とのかかわりは母親よりも薄くなる。その分、休みの日などに父親が遊んでくれたという記憶は娘の心の中に留まり、青年期になっても振り返って想起することができるのではないかと。中丸ら(2010)は、父親から受けたpositiveな身体接触が攻撃性を低め、向社会的行動と自尊感情を高めることを明らかにしている。その中でも自尊感情に関しては、幼児期に受けた父親からの身体接触量が母親から受けたもの以上に関連しているということが認められた。このように、幼児期における父親との情緒的なかかわりは、娘にとって母親以上に大きな意味を持つものであると考えられる。遊んでくれたことや面倒を見てくれたことなど、幼少期における父親との情緒的な交流は、娘の記憶に残り続けるだけでなく、自尊感情の高まりなどその後の心理発達を支えるものにもなるのだろう。

#### 7) 家庭では見せない一面

父親には家庭では見せない一面があることが見出された。その内容は主に社会人としての一面であった。Bさんは「たまたま父の職場の人の話を母が聞いたらしくて、それだと職場ではまともって言うか、普通に話をしているらしいので、その辺ちょっと謎なんですけど、家だとしゃべらないです」と語っていた。家庭では物静かだが職場では人並みに話をしているという、家庭の中の父親としての顔と社会人としての顔が異なっている様子がかがえた。父親に限らず、誰しも家庭や学校、職場など、それぞれが置かれている場での顔を使い分けているが、娘から父親がこのように見えているのは、娘にとって父親は家庭の中の人であるという前提がある。娘にとって父親は基本的に家庭の中の人であるから、何らかの場面で父親の社会人としての一面に触れることで、家庭では見せない父親の一面に気付くのだろう。

#### 8) 威厳のある父親像

父親は物静かで何を考えているのかわからないというような語りがあったが、娘は父親にとって性別の異なる子どもであり、どのように接したらよいかかわからないという戸惑いから、会話が少なくなるという傾向もあるのではないかと。尾形(2007)は、伝統的

な父親像は権威や厳格さを主体とするものであると述べており、今回得られた威厳のある父親像というのは伝統的な父親像であると捉えることができるだろう。Dさんは「お母さんよりは親として見てるっていうか、ちょっと対等じゃない。話すときは普通に話すけど、ちょっと壁はあるかなって思います。」と話した。親子という立場は同じでも、母親より父親との関係のほうが距離のある関係であり、父親としての立場上、娘が感じ取る威厳という側面が大きいのではないだろうか。

### (3) 母娘関係についての結果と考察

#### ① カテゴリー一覧

母親については、調査協力者8名の計48のサブ・カテゴリーをもとにカテゴリー化を行い、6つのカテゴリーを抽出した。全体のカテゴリー一覧を表7に示した。

表7 母親についてのカテゴリー一覧

カテゴリー	
親密な関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身近で仲の良い関係</li> <li>・昔から良好な関係</li> <li>・相談相手になっもらう</li> <li>・成長とともに増す親密さ</li> <li>・友達のように仲良しな関係</li> <li>・友達のように接しやすい</li> <li>・直接的なコミュニケーション</li> <li>・距離の近い関係</li> <li>・話を聞いてくれる</li> <li>・良いイメージ</li> <li>・気持ちの共有</li> <li>・話し方が似ている</li> <li>・性格が似ている</li> </ul>
ほどよい距離感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近くにいたからうまくいかない関係</li> <li>・離れてうまくいく関係</li> <li>・離れたことによる両者の心境の変化</li> <li>・成長とともに良くなったイメージ</li> <li>・離れてみて感じたありがたみ</li> <li>・実家にいた頃の安定しない関係</li> <li>・関係性の変わらなさ</li> </ul>
母親への客観視	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもっぽい</li> <li>・自分基準な考え方</li> <li>・イライラしている</li> <li>・成長とともに見えてきた欠点</li> <li>・マイペース</li> <li>・明るい</li> </ul>



<p>家族への愛情</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族を大切にする姿</li> <li>・娘のことを思っでの行動</li> <li>・欲しいものを買ってくれる</li> <li>・子どもへの平等な接し方と関係性</li> <li>・小さい頃のしつけ</li> <li>・小さい頃遊んでくれた</li> <li>・娘の周りの人も大切に</li> <li>・子どもを楽しませてくれる明るさ</li> <li>・楽しませてくれる</li> </ul>
<p>尊敬と感謝の気持ち</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常における感謝</li> <li>・尊敬の気持ち</li> <li>・存在の大きさ</li> <li>・メンタルの強さ</li> <li>・父親の役割も担ってくれた</li> </ul>
<p>頼られているという感覚</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相談されることで感じる自分への信頼</li> <li>・愚痴を聞いてあげる</li> <li>・娘への支持的な態度</li> <li>・口出しをせず愛情を注いでくれる姿</li> <li>・干渉しすぎない態度</li> <li>・子どもの意思を尊重する</li> <li>・娘への理解、娘への信頼</li> </ul>

## ②各カテゴリーについての考察

各カテゴリーについて考察する。斜体の文字は調査協力者の発言である。

### 1) 親密な関係

母親との関係については、以前から良好で、距離の近い関係だという語りが多くあり、連絡も頻繁にとるようだった。母親と娘の関係は「一卵性双生児現象」(柏木・平木, 2009)と表現されるほど緊密であるといわれており、本調査でも母親と娘の心理的距離の近さがうかがえた。娘にとって母親は同性の親であるため、相談することや共感することが多く、母親にとっては同性の子どもであるため自分のよき理解者として捉え、両者は親密な関係を築いているのであろう。また、成長するとともに親密度が増したという声もあった。Aさんは「友達に近いなって思うことがあります。なんでも話したりするので」と語っていた。友達に近いという表現にも表れているように、親と子という立場での関係ではなく、対等な立場での関係を築いているのだということがわかる。娘は年齢が上がるにつれて母親と対等にコミュニケーションがとれるようになり、何でも話せる身近な存在として接しているのではないだろうか。

### 2) ほどよい距離感

調査協力者は全員が一人暮らしをしており、親と離れて暮らすようになって母親へのイメージがよい方向に変化したという語りが多くみられた。Cさんは「今はすごく安定してるってうか、これくらいの距離感がぶつからない」と言い、Hさんは「こっち来てから、自分で全部やるようになって、お母さんのありがたみがわかるようになりました」と語った。実

家で一緒に暮らしていた頃は、母親との関係での距離の近さから衝突する機会が多くなるが、離れて暮らしてみると母親に対するありがたみを感じるようになったようである。母親との仲の良い関係性自体はそれほど変化しないものの、母親と空間的に距離を置くことによって日常的に言い合いをする場面が減少し、その分だけ、母親の存在の大きさを実感するのであろう。母親の側から考えると、実家で一緒に暮らしていると娘への口出しや注意をしたくなるが、離れて暮らしているとそのようなことがなくなり、時々帰省してきたときには優しく接しようとするのではないだろうか。そしてその接し方が、娘に対してよいイメージを持たせているという場合もあるだろう。

### 3) 母親への客観視

母親を客観視し、冷静に母親を捉えている語りがみられた。Eさんは、「子どものときはお母さんがなんでもできる人みたいなふうにして、でも普通にだんだん大きくなってくると、別にそんなことはないなあって思う感じで、[中略] 子どもみたいだなんて思うんですよ。」と話した。小さい頃は母親を何でもできる絶対的な存在だと信じていたが、成長とともに自分と同じ一人の女性として母親を客観的に見ることができるようになり、母親の欠点などに気づくのだろう。母親を客観視することで見えてきたのは悪いところだけでなく、明るさやマイペースさなど、ポジティブな面も改めて見えてくるようであった。ある程度の距離から母親を眺め、自分と同じ一人の女性であると気付くことが、娘の精神的自立に寄与するのであろう。

### 4) 家族への愛情

家族に対して愛情を持って接しているという母親像がみられた。Gさんは母親を「自分のことよりも私とか妹とか、お父さんのことを第一優先に考えてるというか、自分よりも家族っていうふうに多分考えてる」人だと捉えており、家族のために行動する母親の姿が感じられる。また、子どもへの接し方が平等だという語りもあったが、父親による子どもへの接し方については兄や弟に対して厳しいが、自分にはあまり厳しくないという発言もあった。田中(2006)は父子関係では子どもの性別によって違いがあり、男子は父が自分に対して統制的で厳しいと捉え、女子は父が受容的で優しいと捉える傾向があること、母子関係では子どもの性別での違いは現れないことを示している。このような傾向は、本調査の協力者の親子関係でもみられた。父親に比べて母親は子どもの性別に関係なく平等に接し、分け隔てなく優しさや厳しさを与えているのではないだろうか。そのような姿を見て、娘は母親を家族への愛情を持った、包容力のある存在だと感じるのであろう。

### 5) 尊敬と感謝の気持ち

母親に対する尊敬の念や感謝の気持ちを感じている様子がうかがえた。母親からしてもらって嬉しかったことについて尋ねた際には、帰省したときに好きなものを作ってくれたり、一緒に買い物に行ってくれること、相談相手になってくれるなど、日常的な出来事が挙げられているのが特徴的だった。母親と娘は普段から親密な関係であることが多く、一緒に過ご

す時間が長いと、日常的な出来事が多く語られたのではないかと。Fさんは、「同性としてもそうですし、自分が今の年齢になって、昔いろいろ怒られたこととか、一緒になんかしてくれたこととか考えて、こういうお母さんになりたいなって自分も思う」という、自分の母親が理想の母親像であると語った。このように、娘は母親を女性として、そして母親としてのモデルと捉えている面があるといえよう。

#### 6) 頼られているという感覚

母親は自分を信頼し、意思を尊重してくれるという語りや、母親が自分を頼ってくるという発言が多くみられた。母親に頼られる場面は、大学生になってから増えたようだった。頼られる内容は、相談されたり愚痴を聞く相手になったりするということであった。Eさんは、「今家のみんなとうまくいかないなみたいな相談してくるようになりました。」と語り、Gさんは「お母さんといろんな話をして、妹のこととかも聞いたりたまにするので、お母さんの愚痴じゃないですけど、そういう話とかされたりするので、それは信頼されてるかなって思います。」と語っていた。母親が娘を頼りにして相談などをするようになった背景には、娘が大学生になり、対等にコミュニケーションが取れるようになったということがある。娘が一人暮らしで家族から離れて生活しているため、家族の一員ではあるが家族から空間的に距離を置いた存在として、娘を相談相手にしやすい面もあるのではないだろうか。娘は、母親から相談されるなど今まではなかったようなことを経験することで、母親からの信頼を感じるのだと考える。

#### (4) インタビュー調査のまとめ：父娘関係と母娘関係の比較を通して

まず親子の心理的距離について比較すると、父娘関係においては両者の間に距離があるのに対し、母娘関係においては距離が近いという違いがあるということが分かる。父娘関係における親子の距離には父親の性格や仕事上の都合から個人差があったが、母娘関係はほとんどの協力者が親密であり、親子の距離の近さがうかがえた。また、両親から離れて暮らすようになったことで、親子関係はそれぞれ変化したと考えられる。父娘関係はそれまでの疎遠な関係が見直され、積極的にかかわるようになった調査協力者もいた。母娘関係は互いにぶつかることが減り、安定したものとなった様子だった。娘が親に接するという態度にも父娘関係と母娘関係で違いがみられた。母娘関係においては親密性の中で互いに積極的にかかわっているのに対し、父娘関係では親子のかかわりが少ない時期を経て再びかかわろうとしている娘の意識が見えた。

家族のために行動をする姿は父親における「父親との情緒的な結びつきの想起」と「父親による家族の配慮への気づき」、「陰から見てくれている」、母親における「家族への愛情」という形でみられた。父親は小さい頃に遊んでくれたり、家族の役に立つように何らかの行動をしてくれたり、表には出さないがいつも見てくれている存在であり、母親は家族のために身近で愛情を注いでくれる存在であると認識しているのだろう。一方で、どのよう

な対象として親を捉えているかについて比較すると、父親はいざというときに頼る対象として、母親は尊敬や感謝を向ける対象として捉えているという違いがある。重要な決断をするときや将来の相談をするときなどは父親を頼りにし、力を借りることがあるが、母親は日常から相談事をするなど精神的な支えとして尊敬や感謝を感じている。娘を頼りにするという内容は母親においてよくみられたが、父親においてはみられなかった。母親を助ける場面があることは、母親を客観視できるようになり、完璧な人間ではないことを実感することから行われていると考える。

全体を通して、女子大学生の父娘関係の最大の特徴は、離れて暮らすことによって父親を再評価している点であり、母娘関係の特徴は、娘が母親を客観視するようになっている点であると考えた。これらの関係性は心理的な成長や居住形態の変化などが背景にあるため、娘が大学生くらいになってからみられるようになったものであるといえる。どちらも娘の視点への変化が起きたものであり、父親への再評価によって父親への距離を縮め、母親への客観視によって距離を置いて母親を見るようになるのだと考える。大学生という時期は、娘にとって父親や母親との関係を自発的に変えていく期間であるのだろう。だが、そのような変化が生じて、父親との距離のある関係性と母親との親密な関係性は逆転しないのではないだろうか。

#### 4. 総合考察

##### (1) 娘による父親の再評価と再接近

質問紙調査では父娘関係において居住形態による差は生じていないということが示されたが、一人暮らし群の女子大学生へのインタビューでは、父親と離れて暮らすことによってその関係や父親イメージが変化したという傾向がみられた。調査協力者たちは、反抗期などで父親とあまり話さなかった時期の反動で、一人暮らしをしている現在は日常的に接することがない分、たまに会ったときには自分から積極的にかかわりたいと感じていた。大学生になった娘から父親に積極的にかかわろうとしている様子から、幼少期の情緒的な交流の豊かさ、思春期のかかわりの少なさを経て娘から父親への再接近が起こっているといえよう。また、大学生は近い将来に職業選択を控えた時期にあるため、父親から将来についてアドバイスをもらったり、社会人の先輩として父親を尊敬するようになるなど、父親の存在を再評価している様子がかがえた。ただし、父親への再評価や再接近という動きが女子大学生における父娘関係の特徴であるといえるかどうかは、男子大学生への調査と合わせて再検討する余地はあるだろう。また、娘が父親を仕事に就く上でのモデルとすることには、娘が大学に進学していることと、父親との交流があることが前提にある。2017（平成29）年度版男女共同参画白書によれば、女性の大学進学率は57.1%であり、その割合は長期的に上昇傾向にある

という。女性が自分自身で大学卒業後の進路を決めるようになったことと、青年期に父親に再接近し交流があることが重なって、社会人のモデルとして、娘の眼に父親が映るのだろう。

父親を社会人の先輩として捉え、父親の存在を再評価することは、娘が将来の働き方を考える際に役立つ。小島・今野(2012)は、青年期女子が具体的な将来展望を描く際に、父親の社会的・職業的理解が一つの資源となると述べている。また小野寺(1984)は、自分の仕事のことや社会情勢などについて話をしてくれる父親との接触のほうが、ただ単に親としての行動をとる父親との接触よりも娘から見てより魅力的だと指摘している。父親が自分の仕事について話してくれることは、娘にとって将来の展望を描く助けになるとともに、父親へのイメージをより良いものにするといえる。しかし、自営業である場合を除き、日常生活の中で父親が働いている姿を目にすることはめったにない。そのため、娘が将来の仕事のイメージを持てるようにするためには、父親が娘に対して自分の仕事について積極的に話すことが重要であろう。あるいは、娘から父親の職業について問いかけるといふ働きかけも必要なのかもしれない。そうした相互のやり取りによって、娘は父親を社会人のモデルとして再評価することができるのだろう。

ただ、父親と娘とのコミュニケーションはうまくなされないことも多い。父親が寡黙な性格であればなおさらであり、娘が父親の職業について聞く機会を持つことは難しいこともありうる。そこで、娘による父親の再評価の過程には、両親の良好な夫婦仲のもとで、母親を介したやり取りが必要となる場面もあるだろう。大島(2009)は、青年期後半の娘の父親に対する見方に妻から夫への信頼感が影響している可能性を示唆し、その理由の一つについて、母親の父親への温かい態度や雰囲気を感じ取り、母親と同化して父親に対して母親と似たような認識をもつのではないかと述べている。娘による父親への評価には、母親が父親をどのようにとらえているのが影響している。そのため、母親が娘に父親の職業について肯定的に話すことも職業理解の助けとなり、娘は父親を社会人のモデルとして再評価することができる。このように、娘によって父親が再評価されるためには、父親と娘の相互のやりとりが基本であるが、時には母親も含めたコミュニケーションが必要となることもあるだろう。

## (2) 女子大学生の精神的自立と父娘関係

本研究では、青年期の精神的自立にかかわる要因の一つとして社会的スキルを挙げ、親子関係との関連を検討した。質問紙調査では、父親が娘と手を切る関係であるほど娘のストレスマネジメントスキルやマネジメントスキルも低くなること、娘が困ったときには父親が支援する関係であるほど、娘の積極的な会話スキルが高くなること、娘が母親から信頼・承認されているほど、また、母親が娘を頼りにしているほど、さまざまな社会的スキルが高くなるということが明らかになった。これらの結果から、両親との信頼関係が高いと、娘の社会的スキルもが上昇し、その傾向は特に母娘関係において強くなると推察された。インタ

ビュー調査においても、母親とのかかわりの中で、社会的スキルを身につけたという語りが多くみられた。これらの調査から、社会的スキルの獲得という側面での精神的自立は、父親よりも母親との関係性の関連が高いと考える。

では、父親との関係が女子大学生の精神的自立に与えている影響には、どのようなものがあるのだろうか。インタビュー調査で得られたカテゴリーを概観すると、娘が父親を再評価することが精神的自立と深くかかわっていると考えられる。父親を社会人の先輩として尊敬したり、父親から就職についてアドバイスをもらったりすることを通して、娘は社会に目が向くようになり、親からの精神的自立が促進されるといえるだろう。一方で、母娘関係では、母親との親密な関係を築きながらも、母親を客観的に捉える視点を持てるようになることと精神的自立との関連がみられる。母親と娘は青年期以降も親密な関係を築くことが予想され、そのような中でも母親を客観的に見るができるようになることで、対等な人間としての関係を築き、精神的に自立していくことができるのではないだろうか。大島（2014）は、青年側から見た親に対する認識の変化は「親の視点に立つ」段階の次に「親を捉え直す」段階へと進み、「親へのイメージを統合」する段階へと変化していくと述べている。インタビュー調査にてみられた父親の再評価や母親の客観視は、「親を捉え直す」段階から「親へのイメージを統合」する段階にかけて行われることであるともいえよう。親を捉え直すことで親への見方を変化させ、改めて親イメージを統合し、父親を社会人のモデルや生き方のモデルとして、母親を一人の女性や母親のモデルとして受け入れるようになるのではないか。このように考えると、父親の社会人としての働き方や生き方を参考にする視点を持つようになることが、女子大学生における精神的自立と父娘関係との関連で主要なことであるといえるだろう。

精神的に自立していく時期であるとはいえ、大学生は依然として親からの支援を必要とする場面がある。その代表的なものには経済的な負担が挙げられるが、就職や進路など、重要なことについて相談するときも親からの支援が必要となると考える。インタビューでの語りを考慮すると、これらの支援をする役割は父親が担うことが多い。父親は、娘の精神的自立に影響を与えるとともに、学費の負担などの支援が必要なときに手助けをする存在であるのではないだろうか。

### (3) 一人暮らしによる自活が親子関係や精神的自立に与える影響

質問紙調査において居住形態により親子関係に差があるかどうかを検討したところ、親と同居していない女子大学生は同居している女子大学生よりも母親から信頼・承認されていると感じていることが明らかになった。また、有意差はみられなかったものの、親と同居していない女子大学生は、同居している女子大学生よりも父親から信頼・承認されている親子関係の平均値は高くなっていた。後者についてはさらなる検討が必要ではあるが、これらの結果から、親と離れて暮らしている女子大学生は同居している女子大学生よりも両親からの信

頼や承認を感じていると捉えることができる。また、インタビュー調査の協力者は全員一人暮らしをしている女子大学生であったが、両親と離れて暮らすことで親子関係が安定したり改善したという変化が起き、親からの信頼や承認を感じやすくなっている様子もうかがえた。自活することで親との関係に変化が生じたり、新たな気づきが生まれたりする。水本（2009）は、親からの精神的自立とは、「子が親との信頼関係を基盤として分離した自己を築き、より高次の対等な人間としての親和性を親との間に獲得すること」であると説明している。このことから、女子大学生が精神的に親から自立していくためには、親との信頼関係を築いていることが前提として必要であるといえる。質問紙調査での傾向を考慮すると、一人暮らしをしている女子大学生は、一人暮らしをしていない女子大学生よりも、精神的自立のために必要な親との信頼関係を築いていると考える。大学生の娘が親と離れて自活することは、親からの精神的自立に影響を与えているのではないだろうか。

## 5. 今後の課題

本研究では女子大学生に焦点を当てて、精神的自立と父娘関係をテーマに調査及び考察を行った。質問紙調査では、女子大学生の父娘関係、母娘関係それぞれにおいてどのような関係がどの社会的スキルと関連しているかを検討した。しかし、得られた回答のほとんどが2年生のものであったため、結果が女子大学生全体の傾向を示しているとは言い難い。加えて、本研究のテーマである精神的自立という点では、2年生よりも学年が上の3、4年生を主な対象として調査することが必要となるのではないだろうか。

インタビュー調査は女子大学生を対象として行い、女子大学生の父娘関係と母娘関係の特徴を精神的自立との関連から検討することができたが、調査協力者は全員一人暮らし群であったため、一人暮らしをしている女子大学生についての考察にとどまってしまった。大学時代に親と離れて暮らしているかどうかによって、親との関係や自立のプロセスに何らかの違いがみられる可能性も無視できないため、今後は親と同居している女子大学生に対するインタビューも行うべきであると考え。また、先述の質問紙調査での課題と同様に、調査協力者が全員2年生と学年に偏りが出てしまったため、対象者の設定の見直しが求められるだろう。さらに、本調査では協力者全員の語りを分類し、考察を行ったが、単身赴任による父親との別居や家族仲、夫婦仲の良好さのばらつきなどがみられ、協力者によって家庭内の状況はさまざまであった。そのような違いを考慮し、詳細な分析を行うことによって、より現状に近い父娘関係や母娘関係を理解することができると考える。

## 6. 文献

- 藤原あやの・伊藤裕子 (2010) 青年期後期から成人期初期における女性の心理的発達—母娘関係が心理的健康に及ぼす影響—. *カウンセリング研究*, 43(1), 33-42.
- 伊藤桂子 (2005) 青年期の家族機能認知に関する研究. *臨床教育心理学研究*, 31(1), 29-41.
- 柏木恵子・平木典子 (2009) 家族の心はいま 研究と臨床の対話から. 東京大学出版会.
- 春日由美 (2000) 日本における父娘関係研究の展望—娘にとっての父親—. *九州大学心理学研究*, 1, 157-171.
- 菊池章夫 (1988) *Kiss-18* (堀洋道監修/吉田富二雄編 心理測定尺度集Ⅱ). サイエンス社, 170-174.
- 小島真紀子・今野歩 (2012) 青年期女子における父親役割の認識. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 54(0), 289.
- 楠奥繁則 (2009) 大学生の進路選択セルフ・エフィカシー研究 *KiSS-18*からのアプローチ. *対人心理学研究*, 9, 109-116
- 久和佐枝子・梁明玉 (2006) 中年期女性の親子関係—サンドイッチ世代の2つの親子関係のための尺度開発—. *お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要*, 3, 141-146.
- 水本深喜 (2009) 青年期から成人期への移行期の親子関係—特に母娘関係に焦点を当てた研究の展望. *青山心理学研究*, 9, 71-82.
- 水本深喜 (2016) 母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響—「母親への親密性尺度」による検討—. *青年心理学研究*, 27(2), 103-118.
- 中丸澄子・篠原稚恵・坂本萌・来島千穂・上杉美和 (2010) 娘の自己受容の源泉としての父親—3要因仮説の検討と父娘関係尺度構成の試み—. *広島文教女子大学心理臨床研究*, 1, 12-20
- 野間あずさ・牛尾恵・横瀬洋輔・境泉洋 (2013) 女子大学生における母娘関係が娘の自尊感情と抑うつに与える影響. *徳島大学人間科学研究*, 21, 35-47.
- 尾形和男 (2007) 家族システムにおける父親の役割に関する研究. 風間書房.
- 小野寺敦子 (1984) 娘からみた父親の魅力. *心理学研究*, 55(5), 289-295.
- 小野島萌 (2016) 青年期の親子間コミュニケーションのあり方：青年の発達とOlsonの円環モデルの視点から. *お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要*, 18, 37-45.
- 大島聖美 (2009) 妻から夫への信頼感が青年期後半の娘の心理的健康に与える影響. *発達心理学研究*, 20(4), 351-361.
- 大島聖美 (2014) 青年の親に対する認知の重要性—青年期の親子関係研究及び親準備教育の観点から—. *広島国際大学心理科学部紀要*, 2(1), 69-78.
- 大島聖美 (2016) 青年から見た父親及び母親の好ましい姿—KJ法による構造化を通して—. *広島国際大学紀要*, 4, 13-24.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. *日本教育心理学会教育心理学研究*, 44, 11-22.
- 鹿内啓子 (2013) 大学生の職業決定と親子関係との関連性についての面接調査. *北星学園大学文学部北星論集*, 50, 1-12.
- 下茂郁佳・桂田恵美子 (2015) 娘の父親に対する評価に関する研究. *関西学院大学心理科学研究*, 41, 51-56.
- Strauss, A. & Corbin, J. (1990) *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, 2nd ed Sage Publications New York. (質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順, 操華子・森岡崇訳, 医学書院, 1999)
- 田中正 (2006) 子どもの性差を通してみた親子関係の意識の違い. *名古屋文理大学紀要*, 6, 99-101.
- 渡邊恵子 (1998) 女性・男性の発達. 柏木恵子 (編著) *結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達—*. ミネルヴァ書房.